

マイケル・ポランニーの知識論からみた型の学習

— ヘリゲル著『弓と禅』を手がかりに —

岩 井 哲 雄

Form Learning Seen from Michael Polanyi's Epistemology
— With Reference to “ZEN in der Kunst des Bogenschiessens” —

IWAI Tetsuo

はじめに

日本の伝統的な武道や芸事の習得においては、型が尊重されている。こうした世界に無縁な人々は、型は何らかの普遍性をもつからこそ、尊重されると考えがちである。しかし、様々な武道や芸事の領域において、型を破ることや型から離れることが繰り返し説かれているように、実際の技の継承において、型は必ずしも普遍的なものとして扱われているのではない。では、仮に型が普遍性をもたないとすれば、それは技の習得において、いかなる役割を果たし、いかなる意味において尊重されるのであろうか。本稿は、マイケル・ポランニー (Michael Polanyi) の暗黙知 (tacit knowing) の理論によって、この問題を説明することを狙いとしている。

その際、オイゲン・ヘリゲル (Eugen Herrigel) の弓道修業が提起する問題を、暗黙知の理論に対する試金石としよう。そもそも、弓道というシンプルな武道は、学習論としての暗黙知の理論が解くべき問題を、簡潔に示してくれる。逆に、暗黙知の理論は一般性のある理論であるから、それはヘリゲルの報告を説明し得るものでなければならないだろう。¹⁾

はじめに、ヘリゲルの著作をあえて用いる理由をここで述べておこう。その第一の理由は、ヘリゲルが十分な訓練を受けた哲学者だということにある。ここから、彼の著書には、己れの体験についての、可能な限りの正確さと厳密さをもつ記述を期待し得るであろう。第二の理由は、彼が日本で生い育ったのではないということにある。それゆえ彼には、日本人なら無自覚なままに納得している事柄に対して、自覚的な態度を期待できる。第三の理由は、彼の著作が弓道家や日本人ではなく、より一般的な読者に向けられたものだということにある。つまり彼の著作は、限られた人だけに通じる表現ではなく、ドイツ文化と対照された、より一般性のある表現を用いていると期待できるであろう。

では、ヘリゲルの著書『弓と禅』が提起する問題を明らかにしておこう。まず、同書に従えば、ヘリゲルの弓道の修業過程は、弓道の技術的な段階に沿って、大きく三つに区分できる。

すなわち、①弓を引くこと、②矢を放つこと（放れ）、③的を射ること、である。この三つの段階に対して、弓道の教師である阿波研造から与えられた課題は、①腕の力で弓を引いてはいけない、②意図的に矢を放ってはいけない、③的を狙ってはいけない、というものであった。

ヘリゲルは苦闘しつつも、阿波の教えを体得していく。何か芸事を学ぶ者は、ヘリゲルのこの記述に共感を覚えるかもしれない。しかし、ヘリゲル同様の困難と格闘している者が、この著作から何か脱出の糸口を得ようとしても、恐らく失望することになるだろう。というのも、ヘリゲルは、どのようにして困難を克服したのかということについては、何も説明していないからである。この著作では、苦闘の過程の詳細な記述に比べて、教えの体得される場面の記述は極めて簡略である。それは、教えの体得が「自ずから」生じたことを示しているように思われる。では、このような、自ずからの達成とは一体何であろうか。これが第一の問題である。

また、阿波の与えた三つの指示は、いずれも「無心」ということに関係があるように思われる。そして実際、ヘリゲルの達成は、こだわりを無くすことによって生じている。では、無心ということは、芸の達成においてどんな意味をもつのであろうか。これが第二の問題である。

また、阿波がヘリゲルに与える指示は極めて少ない。彼が教示する方法は、実例を見せること、手をとってやり方を教えること、譬えを用いた簡単な説明を与えることぐらいである。しかも、その説明は、ヘリゲルにとって完全には理解できないものでもある。このような曖昧な教えによって、なぜ達成が可能となるのであろうか。これが第三の問題である。

本稿は、上記の問題、つまり曖昧な教えに従った、そして無心による自ずからなる達成の仕組みを、型の学習という観点から解明するものである。以下では、まず1章において、学習論としての暗黙知の理論の基本的構図を示す。ここでの議論は、前記の問題からは一旦離れるが、しかし2章以下の議論の基礎となる。次いで2章では、ポランニーの理論に基づき、「型」を定義する。その第1節は型の一般論であり、同時に型の「曖昧さ」の理由を与えるものである。第2節は達成の一般論であり、同時に「無心」「自ずから」という概念の解明の予備考察である。第3章では、以上の議論を実際にヘリゲルの体験に適用することになるだろう。

第1章 学習論としての暗黙知の理論

ポランニーの分析によれば、あらゆる知識はつねに包括的存在（comprehensive entity）と諸細目（particulars）と呼ばれる二つの項から成る。例えば、人は目を閉じたまま、杖を使って道の様子を知ることができる。このとき彼の注意は、手元ではなく、むしろ杖の先が道と触れ合うところにある。しかし、彼が直接受け取るのは掌の振動であって、この振動に拠らずして、道の様子を知ることとはできない。それゆえ、ここでは、知識は、杖の先に感じられる道の様子、および掌に感じられる杖の振動、という二つの項から成ると見なし得る。

ここで、杖を使う人は、この二つの項に対して二つの異なる感知の仕方を行なっている。彼は、道の様子に自覚的な注意を向け、それをそれ自体として感じている。このような自覚的な注目は焦点的感知（focal awareness）と呼ばれる。他方、掌の振動に対しては、彼は自覚的な注目を向けてはいない。むしろ彼は、その振動を手掛かり（clues）ないし用具（instruments）

としてのみ感じている。このように、それ自体としてではなく、用具として感知する仕方は、従属的感知 (subsidiary awareness) と呼ばれる。そしてこのとき、焦点的に感知されるものが包括的存在と呼ばれ、従属的に感知されるものが諸細目と呼ばれるのである。

以上のように、知る人 (knower) は、諸細目を従属的に感知することによって、それを手掛かりとして利用し、その結果を包括的存在として焦点的に理解する。これが全ての知識に妥当する暗黙知の構造である。ポランニーは、この構造を形成する行為を包括 (comprehension) と呼んでいる。以下ではさらに、後の議論に関わる範囲の、暗黙知の特徴について見ておこう。

まず第一に、包括的存在を、それ自体として見られた諸細目へ還元することは不可能である。仮に、これが還元可能だとすれば、掌の振動を前提することによって、道の様子が演繹的に推論されることになる。しかし、掌の振動をそれ自体として知っているという状態は、杖を道を知る用具としては知らないということ、つまり杖を使えないということを意味する。したがってまた、それは、道の様子については何も知らないということの意味するだろう。それゆえ、道の様子とは、手元の振動には還元できない、何か新しいものであると考えねばならない。

このように、包括的存在が諸細目に還元できないとすれば、知識を形成する仕方は非形式的だということになる。なぜなら、知識が形式的に導出されたならば、この知識は諸細目へと還元できるはずだからである。それゆえポランニーは、包括を、知る人の暗黙的な力 (tacit powers) による非形式的で能動的な活動と考える。そして、包括とは何か新たなものを生み出すことであるから、それは一つの達成 (achievement) に他ならないのである。

第二に、包括において、知る人は知識の諸細目を同化する。例えば、杖の使用者にとって、杖は従属的に感知され、それ自体として明示的に捉えられてはいない。それは、「具体的な性質を失い、あたかも透明であるかのようになる」(Polanyi, 1969 : 185)。この透明性は、人間が自己の身体を感じる仕方と類似しており、彼が諸細目を身体の一部として同化 (assimilation) していることを示している。これは、見方を変えれば、彼が杖に棲み込んでいる (indwelling) ということに他ならない。つまり、知る人は棲み込みによって、諸細目と関係を結ぶのである。

この棲み込みという在り方は、知識の信用性の根拠をも示している。そもそも、諸細目とは知識の基盤である。しかし、この基盤は身体に同化されねばならず、この基盤と身体との厳密な境界線はない。それゆえ、知識の信用性は、自らの身体への信用性と同じであると考えねばならない。つまり人間は、自らの身体を信用するのと同じように、自ら所有する知識を信用するのである。ポランニーは、このような信用のあり方を、批判的 (critical) でも無批判的 (uncritical) でもなく、不批判的 (a-critical) であると言う (Polanyi, 1974 : 264)。このように、知識の根拠は、究極的には、不批判的な信念である。²⁾

この不批判的な信念は、学習においても重要な役割を果たしている。つまり、この信念は学習において不可欠な要素なのである。どんな知識も、その手掛かりが同化されて、初めて理解される。それゆえ学習者は、ある知識を理解する前に、まず手掛かりを同化しなければならない。しかし、同化は批判的ないし無批判的には行なえない。学習者は、当の知識が真理であるという信念を持つことによってのみ、その手掛かりを同化し得る (Polanyi, *ibid.* : 296参照)。つまり、知識はまず信用され、その後で、理解がそれに追い付くしかない。したがって、知識

を受容しようとするとき、学習者は、伝統を権威と見なし、それに服従（commit）しなければならない。³⁾つまり学習においては、権威に服することが不可欠なのである。

最後に、なぜ暗黙知の理論を学習論と見なし得るのかを述べることにしよう。暗黙知の構造から分かるように、全ての知識は、その一要素として「知る人」を欠くことはできない。このことは、知識とは知る人から自立した存在ではなく、むしろ一種の行為であるということを示している。すなわち知識とは、「技能的な達成の形成（the shaping a skilful achievement）」という行為に他ならない（Polanyi, *ibid.* : vii参照）。それゆえ、暗黙知の理論は知識形成一般の理論だといえる。明らかに、発見という出来事は、そのような知識形成の典型である。しかし、学習もまた、この知識形成の一例である。なぜなら学習は、たとえその内容が他者には既知のものであるにせよ、学習者にとっては何か新たなものの創出であり、この意味で、発見に他ならないからである⁴⁾。したがって本節の議論は、そのまま学習論の枠組を与えていると見ることができる。ただし、学習（達成）の具体的な過程については次章で扱うことにする。

第2章 暗黙知の理論による「型」の解釈

第1節 型とは何か

本節では、ポランニーの立場から、「型」とは何であるかを考察する。しかしポランニーは、日本の芸道にいう型に相当する概念（例えば“form”や“style”）を用いていない。そこで、「枠組」という、型に近縁の概念を通じて、「型」を規定することとしよう。なお、枠組という概念を中心として、ポランニーの理論を解釈することは、これまで無かったと思われる。それに対し、本章の議論は、枠組という概念を中心に据えた、暗黙知の理論の再構成であり、特に次節は、この立場からの暗黙知の理論の一解釈であることを、お断りしておく。

さて、まず枠組とは何であろうか。ポランニーは、様々な手掛かりのうち、特に知的な道具を指して枠組（framework）ないし解釈の枠組（interpretative framework）と呼ぶ。それは、知的な判断を支える、いわば「先行仮説（pre-supposition）」（Polanyi, *ibid.* : 59）である。具体的には、科学理論や宗教儀式や芸術作品などが枠組と見なされる（Polanyi, *ibid.* : 201）。しかし、ポランニーは、知覚や欲望の根底にも「枠組」を認めているのであるから（Polanyi, *ibid.* : 106）、枠組とは、あらゆる知識の根底に一般的に想定されるものと考えてよいだろう。

枠組は手掛かりに他ならないから、それは「棲み込むことによって利用され」（Polanyi, *ibid.* : 195）、それにより人間は何事かを理解する。例えば理論や芸術作品や宗教儀式に棲み込むことによって、現実世界、芸術的世界および宗教的世界について、人は何事かを知ることができる。しかし、人がこれらの枠組へと棲み込むことの、より根本的な利益は何であろうか。

上述のように、理論は枠組の一つである。この理論の与える利益についてポランニーは次のように言う。まず、「総ての理論は空間と時間におたって広がる一種の地図と看なすことができ」（Polanyi, *ibid.* : 4）る。そして、人が地図に依拠するとき、「その地図から多様な道程を読み取るという非形式的な操作（operation）が生ずる」（Polanyi, *ibid.* : 83）と。つまり、人は地図の表す概念をまず理解し、次いで、「この概念を再組織（reorganizing）して、自分に関

心ある特定の道程を顕示するようにする」(Polanyi, *ibid.* : 117) ののである。

このように、地図すなわち理論は、それを再組織しようとする暗黙の力、すなわち「非分画的な精神的な力 (inarticulate mental power) を助けるがゆえに有効」(Polanyi, *ibid.* : 83) なのである。それゆえ、枠組は、それによって何事かを理解するためだけに利用されるのではなく、むしろ、それを通して知る人の暗黙の能力 (mute ability) が成長し続けるための基盤となるのである (Polanyi, *ibid.* : 70参照)。これが、枠組が人間に与える根本的な利益である。

では、枠組は、暗黙の力を助けることによって、何を明らかにするのであろうか。ポランニーは、真に客観的な理論や概念や知識は「隠れた含意 (hidden implications)」(Polanyi, *ibid.* : 64) を持つという (Polanyi, *ibid.* : 5, 104, 311を参照)。つまり枠組はその利用者が現に知っていること以上の内容を含意しているのである。例えば杖の使用においては、手掛かりとしての掌の振動は、道の凹凸だけではなく、さらにそれを越える何事かを意味するかもしれない。そして、これらの含意は杖の利用者には差当って明らかではないのである。

そして、この含意は、暗黙の力による枠組の非形式的な操作、すなわち枠組の再組織によって明らかになる。このとき隠れた含意は、何か新しい包括的存在として現われるから、それは枠組から形式的に演繹されるものではない。したがって隠れた含意とは、予めそれ自体として意味を持ちながら、枠組に含まれているものではないことになる。それは、それ自体としては無意味なものであり、暗黙の力による包括によって初めて意味をもつのである。要するに、隠れた含意は何ら枠組の本質ではなく、そもそも枠組は本質というものを持っていないのである。

以上によって、枠組とは何であるか、それはどのように達成と関わるか、ということが明らかになった。次に、後の議論に関わりをもつ範囲で、枠組の特徴を取り上げることしよう。

第一に、枠組への棲み込みにより、人は世界に対するある種の「情動 (passion)」(Polanyi, *ibid.* : 173), 例えば歓喜 (Polanyi, *ibid.* : 133) や興味 (Polanyi, *ibid.* : 195) などを持つことになる。特定の興味は、特定の枠組への棲み込みによってのみ喚起される。例えば、数学的な興味は、数学理論に棲み込むことによってのみ喚起され、特定の道徳的感情は、特定の道徳体系への棲み込みによってのみ喚起される。一般に、枠組への棲み込みは、知る人をして、その枠組に固有の知的な態度をとらせるのである。そして、ここで喚起される情動に従うことにより、枠組の含意が探求される。これが、人間の知的な探求の在り方である。この結果得られる知的な体系は、「情熱の力によって建てられたもの」であり、それは「この情熱に創造的展望を与え」、「その永続的構造はこの情熱を引き続き育み充足」する (Polanyi, *ibid.* : 173)。この循環が知識の探求を継続させ、その過程において暗黙の力が成長するのである。

第二に、枠組は厳密なものである必要はない。「地図は、その縮尺が1に近づくほど正確になるが、しかし万一、それが1に達してしまい、地形の特徴を実物大で表してしまったとしたなら、それは役に立たない」(Polanyi, *ibid.* : 81)。つまり、地図はその正確さを犠牲にすることによって、初めてその利便性を得る。このように、人間の暗黙の力を拡張するという目的にとっては、枠組の厳密性は不可欠な条件ではない。むしろ、枠組は何らかの曖昧さというものを必要としている、とさえ言うことができる。つまり、この曖昧さを埋め合わせるように、暗黙的な力がより有効に働かされるのである。

さて、身体動作の「型」もまた、枠組の一つだと考えることができる。ポランニーは、宗教儀式を一つの枠組と見なしている。また彼によれば、挨拶や常套句の交換は「仲間付き合いの分画化」(Polanyi, *ibid.* : 210) であるから、そうした作法は分画的体系である⁶⁾。つまりポランニーは、形式化された動作の体系を枠組の一つと見なしているといえる。そして、型もまた形式化された動作の体系であるとすれば、これを枠組の一つと見なすことは可能であろう。

しかし上の議論は、型を単なる形式的な身体動作と同一視している、という批判を受けるかもしれない。というのも、型の従来の定義は、主として型のもつ理念性に注目しているからである。例えば、源了圓は、型を「形の洗練であり、合理化・機能化・美化であり、形の形である」(源, 1989 : 36) と定義する。また、生田久美子は、型を「人間の生活のなかで生じてくる「形」の意味」(生田, 1987 : 23) と定義している。つまり、型は形と区別され、形を何らかの意味で超えたものとして定義されることが多かったといえる。

確かに、型は何らかの意味で純化されたものであるかもしれない。しかし型が形の本質であるとは必ずしも言えないだろう。日本的な型の伝統の祖の一人と見なされている世阿弥に関して、相良亨は、「世阿弥が論を建てる時、(物まねすべき) 客体の本質をとり上げ、あるいは本質とのかかわりにおいて論を展開することをしない」(相良, 1995 : 174. 括弧内は引用者) とみる。例えば、世阿弥の体と用の概念も、「現象と本質ではなく、現象次元の中での体用であろう」(相良, 同書 : 174) という。それゆえ、型は形の本質であるという考え方も再考の必要があるだろう。そして、ポランニーの知識論に従う限り、型は本質をもたないのである。⁶⁾

最後に、型という観点から本節の議論を要約しよう。まず、型とは、知る人が棲み込みによって利用するものである。棲み込みは、知る人の身体への型の同化であるから、それは同時に彼の在り方の変化をも意味している。それは単なる身体的変化ではなく、精神的な変化でもある。つまり、型への棲み込みによって、人は独特の興味を持つ。そして、この興味が、型の含意を明らかにし、型を通じた知識の形成をさらに促すのである。この過程により、彼の暗黙の力は成長を続けていく。そして、この過程においては、型が本質をもつ必要はなく、また暗黙の力を有効に働かすためには、型が厳密な形で学習者に与えられる必要もないのである。

第2節 型における達成

本節では、暗黙知の理論に基づいて、型における、あるいは型を通じた達成の理論的構造を明らかにしたい。ところでポランニーは、達成という事態を発見の場 (heuristic field) という図式を用いて説明している。彼は、「暗黙の要素 (tacit component) のあらゆる操作は、場の概念に含まれる (be subsumed under)」(Polanyi, *ibid.* : 398) と述べる。それゆえ、場とは、暗黙の力が枠組を再組織する様子に、別の表現を与えたものであると考えてよい。では、そもそも場 (field) とは何であろうか。

ポランニーの用いている「発見の場」とは、物理学上の場の概念を借用したものであり、「ベクトル場」に他ならない⁷⁾。そしてベクトル場とは、空間内の任意の座標に、方向と大きさという二つの情報が含まれるような空間である。

ポランニーは次のような例を挙げている (Polanyi, 1962 : 128-129)。人は忘れた名前を思い

出そうとするとき、当の名称が喉から出かかっている、という経験をすることがある。このとき彼は、答え自体を知らないが、しかし答えまでの距離を感じていると言ってよい。そして、この解への接近の感覚に従うことによって、首尾よく答えを発見することもできる。それゆえ、この感覚は答えまでの距離と方向という二つの情報を持っていると考えられよう。そこで、この感覚を根拠にベクトル場を仮定することができる。このベクトル場が発見の場である。

ベクトル場、すなわち勾配 (gradient) は、知識の追求者に対して、答の在処を教えるものである。これは次のような比喩的なモデルによって解釈できよう。達成は一つの山の頂点のようなものである。そこで、人が目を閉じて山頂をめざすとしよう。もし彼が裾野にいるならば、山頂がどこにあるのか分からないであろう。そこでは、地面の傾きは小さいからである。しかし、山頂に近づくにつれ、彼は斜面の勾配を頼りに山頂の方向を知ることができる。発見の場の勾配とはこのようなものである。そして、解への接近の感覚は、この勾配に対する応答として生じるものであり (Polanyi, *ibid.* : 398), この感覚に従うことによって、彼は一つの達成を成し遂げることができるのである。それゆえに、この勾配は、「潜在的達成の勾配 (a gradient of potential achievement)」(Polanyi, *ibid.* : 398) と呼ばれている。

では、前節で規定した「枠組」と、ここで規定した「場」とは、どのような関係にあるのだろうか。解への接近の感覚は、本章第1節でみた情動の一種と見なすことができるから、この感覚は枠組への棲み込みによって生じるものである。同時に、この感覚は達成の勾配への反応として生じるものでもある。それゆえ、枠組に棲み込むことが発見の場の成立の条件であり、枠組への棲み込みによって、枠組それ自体が発見の場となると考えてよいだろう。

以上が、達成そのものが成し遂げられる発見の場の概略である。しかし、「無心」と「自ずから」という事態を解明するには、達成における主体についての考察をしておかなければならないだろう。すなわち、発見の場においては、主体はどのように位置付けられるだろうか。例えばバラニーは、「うまい考えの到来は、研究者のそれ以前の努力の成果であるが、それ自体は彼の活動ではなく、ただそれは彼に生ずる」(Polanyi, *ibid.* : 126) ことを指摘している。確かに、達成は、一般に主体の意志を伴う。この意志なしには、どんな達成も不可能だろう。しかし、達成それ自体は彼の活動ではない。この一見したところ矛盾する事実はどう理解すべきだろうか。達成の勾配と主体の意志とは、どのような関係にあるのだろうか。

山崎正和は、世阿弥の提出した成就や序破急の概念を理解するために、気分（ないし動機）と意志とを区別する。彼は、「人間は決して意志によって行動を開始することはできない」(山崎, 1988 : 96) という。むしろ、『やる気になる』という表現が示すように、「われわれは行動の主体的な姿勢のなかへ、皮肉にも、何ものかによって受動的につれこまれる」(山崎, 同書 : 96-97) のである。意志とは「予め用意された気分」に包まれ、それによって半ば背後から押し出された決意であり、これに対して、気分は「すでに行動の序の一部を構成しており、決意に先立って、それ自体の傾きによって破をめざして身構えている」ものである (山崎, 同書 : 120-121)。このように山崎は気分」に能動性を認め、それによって自ずから成り就くことを説明する。山崎のこの説明は、場の理論をめぐる先の矛盾を解くための、さらには日本の文化に重要な位置を占める「無心」を場の理論の中で理解するための、一つの方向を示唆している。つまり、

意志以外の何かに能動性を認めることによって、上記の問題は解かれるだろう。

そこで本稿では、場が持つ達成への傾向を、意志以外の何かだと考えよう。実際このように考える根拠を暗黙知の理論のなかに見出すことは容易である。つまり、そもそも場は枠組の一種の様態であるから、達成の勾配は知る人には従属的にしか感知されないものである。他方、意志は何か明確な内容をもつものであるから、焦点的に感知されるはずのものである。つまり、両者は感知される様態が異なっており、この意味で、達成の勾配は意志以外の何かなのである。

この解釈においては、意志とは、達成の勾配ではなく、枠組の操作を選択するものである。そもそも、どんな操作も枠組に依拠せずに行なえないが、しかし、操作の選択は枠組によって決定されているわけではない。例えば、チェスのルールはゲームの枠組であり、このルールに依拠せずにどんな手も指せないが、しかし、指し手の選択はルールによって決定されているのではない。ポランニーは、こうした状況を境界条件 (boundary condition) という概念を用いて問題にしている。チェスの例では、ルールの境界条件が未決定であり、この未決定さゆえに、意志に基づいて指し手を任意に選択できるのである。しかし、ルールに則るだけの指し手が、必ずしもゲームの流れに沿うとは限らない。同様に、意志が選択する行動は、必ずしも達成の勾配に沿うものではないであろう。むしろ意志は達成の勾配を探り出し、これに己れを一致させねばならない。それゆえ、意志による行動が達成を導くとは、一般には言えないのである。

しかし、意志が達成を導くのではないとすれば、達成への過程はそもそも何時始まるのか、ということが改めて問題となろう。それを説明してくれるのは、ポランニーの「従属的」という概念である。そもそも人は、「非常に多数のことを知っていながら、常にそれについて考えているわけではない」(Polanyi, *ibid.* : 129)。むしろ人はそれを従属的に感知しているのである。例えば、「私は日本語を話すことができる」と主張するために、幾つもの文法規則や無数の語彙を頭に浮かべる必要はない。そう主張するには、文法や語彙の能力を従属的に感知していれば十分である。このように、能力は、それが表面化していない時でも、一つの傾向として働き続けているのである。

ところで、従属的に感知されている能力とは、まさに枠組に等しい。それゆえ上の議論から、枠組はある傾向に従って常に働いている、と結論できるであろう。したがって、達成への過程もまた、枠組の存在と同時に、いつも既を開始されているのである。

本節で明らかになったことを、型に関して要約すれば次のようになる。型は何らかの達成へ向かう勾配をもつ。その傾向は型の存在と同時に存在し、型の存在と同時に達成へ至る過程は始まっている。この状態のなかで、達成を目指す者は、様々な試みを意志的に行なうが、一般にこの試みは達成とは無関係である。むしろ達成それ自体は、意志の選択した行動によって成し遂げられるのではなく、型のもっている勾配に従うことによって成し遂げられるのである。

第3章 暗黙知の理論による型の学習の分析

本章では、これまで論じてきた理論によって、実際にヘリゲルの修業過程がいかに解釈されるのかを見る。以下では、ヘリゲルの修業の段階に沿いながら説明を加えていくことにしよう。

まず、最初の稽古で、阿波は弓について簡単に説明し、次いで弓の引き方を実演した。このとき、弓の「極めて上品な形 (die überaus edle Form)」(Herrigel, 1951 : 27) にヘリゲルの注意を向けさせることが、阿波にとってより重要であるようだった、とヘリゲルは述べている。次いで阿波は、弓を腕の力で引くのではなく「心で引くこと」(ヘリゲル, 1982 : 27) を話し、さらにヘリゲルの手をとって弓の引き方を教えている。

ここで、阿波はヘリゲルの注意を弓の形の美しさへ向けさせているが、ポランニーの理論からみると、阿波のこの振舞いは注目に値する。なぜなら、梓組の喚起する情動、この場合、美に対する情動が、梓組の含意の探求を促すからである。

こうしてヘリゲルは弓を引く練習を始める。しかし、弓を力で引かざるをえないヘリゲルは、「心で引く」というのは単なる言葉の綾であり、そこには何か技術的な骨があるに過ぎないと考える。ここでのヘリゲルの態度は、弓道に対し批判的である。しかし、知識はそもそも不批判的であるために、技芸であれ学の体系であれ、それを批判的に習得することは不可能であろう。

ヘリゲルが自分のやり方の行き詰まりを認めざるを得なくなったとき、初めて阿波は正しく弓を引くための正しい呼吸の仕方を教える。彼の新しい指示は、一切を忘れて「呼吸に集中 (sich auf die Atmung konzentrieren)」(Herrigel, 1951 : 32) することであった。ヘリゲルはこの指示に従って呼吸に集中するように努め、そして遂に弓を心で引くことを習得する。しかし、その経緯については、「なお相当な時間がかかった。しかしついにうまくいった」(Herrigel, *ibid.* : 32) としか記されていない。

ここではいったい何が起こったのであろうか。そして、呼吸への集中には、どのような意味があるのだろうか。ポランニーの理論に基づくとき、呼吸への集中は、ヘリゲルから弓を引く動作への拘りを引き離すための方便であったように思われる。⁸⁾ 呼吸に集中するまでは、型が焦点的に感知されていた。しかし呼吸に集中すると、今度は呼吸が焦点的な感知の対象となり、それまで焦点的に感知されていた型は、今度は従属的に感知されるようになるはずである。実際ヘリゲルは、正しく弓を引く方法について、「どうしてそうなるか、私は全く語る術を知らなかった」(Herrigel, *ibid.* : 33) と語っている。この言葉は、彼が弓の引き方をもはや従属的にしか感知していないこと、したがってまた、弓の引き方が身体と同化されたことを示している。

型と身体との同化は、ヘリゲルによる、型という梓組への棲み込みを意味する。つまり、これによって、単なる動作の手続きでしかなかった型は、梓組としての型、すなわち手掛かりとしての型になったのである。そして、型が手掛かりとして機能することによって初めて、ここから隠れた含意を引き出すことが可能になるのである。実際、阿波は、「あなたが習得したことは、すべてこの放れ (das Lösen des Schusses) のための準備に過ぎなかった」(Herrigel, *ibid.* : 36) と述べている。ここでヘリゲルは、放れのための基盤を得たことになる。

こうしてヘリゲルは、「放れ」の段階へと進むことになる。ここでも阿波はまず手本を見せ、これに次のような注釈を与える。すなわち、放れの際に何をしなければならないかを考えず、弓の弦が親指を不意に切り落とすかのように射なければならない(Herrigel, *ibid.* : 39)、と。阿波によれば、自分が射るのではなく「“それ” が射る (Es' schießt)」(Herrigel, *ibid.* : 65) ことによって射は完成するのである。

ヘリゲルは教えのままに熱心に稽古を続けたが、しかし放れを習得することはできなかった。そして、「この稽古の継続が単に効果がないだけでなく、危険になる恐れさえあった時」、初めて阿波は新たに別の方法を指示する。彼が示した新しい方法とは、道場に来るまでに、「途中ですでに心を集中して (sich sammeln)」(Herrigel, *ibid.* : 44) くることだった。これは、道場での弓道をさらに日常生活にまで拡げること、それによって弓道を道場だけの出来事ではなく、その準備段階をも含めた「礼法 (Zeremonien)」(Herrigel, *ibid.* : 55) とすることである。

では、弓道を礼法とすることは、ポランニーの理論から見たとき、何を意味するだろうか。ヘリゲルにとって、型は既に枠組となっている。そして、矢を放つという意図は、この枠組に依拠しつつ、それを任意に操作するものである。しかし同時に、枠組は発見の場を与え、この場は、意図に先行する、それ自体の傾向を持っている。そして、この傾向こそが「放れ」ではないだろうか。つまり、矢は意図的に放たれる前に、既に自ずから放れるべく存在しているのである。では、それはどこに存在しているのか。

日常生活の中で、あらゆる能力が、実際に使われていない時も常に潜在的には働いているように、型のもつ傾向はヘリゲルの日常の生活においても潜在的に働いているはずである。つまり矢は、道場以外の生活の場に既に自ずから放れるべく存在しているのである。しかし、この矢の存在はヘリゲルには明らかではない。それゆえに、道場へ来る前に精神を集中せよという指示が、意味を持つのだと思われる。つまりこの指示は、達成の勾配に従う際の障害を日常からも取り除き、達成の勾配をより明瞭に感じ取れるようにする意味があるであろう。

ヘリゲルはこうしてより深い集中を得るようになるが、しかし、どうしても意図的に矢を放さなければならないために、再び弓道に対する疑念を持つことになる。しかし、ヘリゲルはこの疑念を厳しく戒められ、それ以降、阿波の教えに服従しつつ練習を徹底することになる。そうしてヘリゲルは、ようやく正しい放れを習得するのである。彼はその時の状況を次のように記している。「ついに、私がこの数年来絶えず苦勞して来たことの一切が、私に何でもなくなったということすら、もはや心にとめなくなった。その頃ある日のこと、私が一射すると、師範は丁重にお辞儀をして稽古を中断させた。私が面食らって彼をまじまじと見てみると、『今し方“それ”が射しました』と彼は叫んだのであった」(Herrigel, *ibid.* : 66)。

放れを習得し、ヘリゲルは「的に中てる」という最後の課題へと進む。ここでの阿波の教えは、中てようとする意図を捨てよ、ということであった。阿波は次のように言う。「奥義は射手から一定の距離をとって立てられている的のことは関知しません。それはただ、技術的にはどんな仕方でも狙われない目標のことを知るのみです」(Herrigel, *ibid.* : 70)。彼は、この目標を「仏陀 (Buddha)」(Herrigel, *ibid.* : 70) と名付けている。

しかし、やはりヘリゲルは的に狙わずにはいられない。しかし、阿波はその原因を、「単に不信のせいだと明言」(ヘリゲル, 1982 : 46)する。そしてヘリゲルは、再び徹底的な練習を通して、「“それ”が中てる」ということを理解するのである。彼は次のように語っている。「私が射る時に二つの目が、あるいはそれ以上の目が私を見ているかどうかということは頭に入らなかった。のみならず先生が褒めるか貶すかということさえ、私に次第に刺戟を与えなくなった。実に、射られるということがどんな意味か、私は今こそ知ったのである」(ヘリゲル, 1982 : 49)。

「放れ」と「中てること」の二つの課題では、程度の差はあっても、いずれも意図を捨てること、すなわち無心になることが求められている。そして、この二つの課題を達成した際のヘリゲルの記述は、彼がまさに無心になることによって目標を達成したことを、示しているだろう。では、無心とはいかなる状態であろうか。

既に見たように、発見の場はそれ自体の傾向、すなわち自ずから「放れ」、さらには自ずから「中たる」傾向を持つ。これに対して、意図は枠組を思うままに操作する、すなわち「放し」、「中てる」ものである。つまり、意図と場の傾向は本来的に異なるものである。それゆえ、意図による選択は、達成の勾配に偶々一致することもありうるが、通常はその勾配に逆らうことになる。それゆえ意図は障害となるのである。したがって、無心とは、障害となる意図を取り除くこと、それによって達成の勾配に従うということを意味することになるだろう。そうすれば、場の力によって、「自ずから」達成が生じるのである。したがってまた、阿波が“それ”あるいは「仏陀」と呼ぶものは、ポランニーの理論においては、達成の勾配に他ならないと言える。

しかし、場の傾向による自ずからの達成を認めるだけでは、「無心」を十分に説明したとは言えない。無心が、時に平常心と同義であるように、心の無い状態ではないのは何故だろうか。ポランニーは、達成の勾配は個人の責務および決意を表すべきである、と主張する (Polanyi, 1974 : 403)。つまり、達成の勾配に受動的に従うとき、これによって心が消滅するのではなく、心はその勾配に一致しているのである。この状態こそ、無心であり平常心であると言えよう。

最終的に、この二つの達成、すなわち「放れ」と「中てること」の達成は、どのようにして生じているだろうか。ヘリゲルの射の失敗は「単に不信のせい」であると、繰り返し阿波は言っている。この言葉が修業の最終段階においても口に出されたことは印象的である。つまりヘリゲルの射の失敗は、全く技術的なものではないのである。ポランニーは次のように言う。「科学がそれ自体として重要である—いな、至上の重要性をもつ—と信じない者が科学上の重要な発見をすることはありえない」 (Polanyi, *ibid.* : 183)。弓道においても同様であろう。阿波が言うような射の可能性を信じない者が、それを成し遂げることは有り得ないのである。不信とは、達成の勾配それ自体を見えなくするものであり、探求それ自身を無意味にするものなのである。そしてヘリゲルは、この不信を徹底的な練習によって克服し、この達成を成し遂げるのである。

おわりに 暗黙知の理論からみた型の学習

通常、「型の練習」という言葉から連想されるものは、弟子は師に絶対的に服従し、厳密に定められた型の模倣をひたすらに繰り返す、という状況であろう。そして、この連想の背後には、型は真理を体現するものである、という思い込みが存在しているように思われる。

これに対して、暗黙知の理論から見たとき、型の学習とは、学習者が型を通して、何かを発見することであった。しかし、その何かとは、型に含まれている本質のようなものではない。つまり、型を学習するということは、型から偶然的なもの、ないし夾雑物を取り除くことによって、型の本質を掴み出すということではない。そうではなく、型の学習とは、学習者が型を通して、型には含まれていなかった何かを、しかし型によって暗示されている何かを生み出すこ

となのである。この意味で、型は可能性の基盤だといえる。

しかし、型は学習者によって、尊重されなければならない。また、学習者は、師に対しても服従しなければならない。それは、型や師が絶対的に真理を体現しているからなのではない。型や師が何か正しいものを示しているという信念が、学習の不可欠な条件だからである。この意味においてのみ、型や師は権威を体現しているのである。

では、徹底した練習はなぜ必要なのだろうか。型が何ら本質と呼べるべきものを持っていないとすれば、練習とは、型から不純物を取り除き本質にまで純化する行為ではない。では練習の意味はどこにあるのか。ヘリゲルは、徹底した練習があったことを報告してはいるが、それと達成との関連については何も報告していない。この事実は、達成は、学習者にとって必然的に理解不能な過程であり、理解によって段階的に接近できるものではないということを示しているように思われる。ただヘリゲルの報告からすれば、練習は信念という条件を伴う場合に限る、無心へと導き、さらには達成をもたらすものだと思われる。

師に服従し、型を尊重し、練習を繰り返すことは、一個の学習を構成する最小の単位であるように思われる。そして、学習が、学習者にとって理解不能な達成という飛躍を含む限り、この単位をより合理化することはできないであろう。それゆえポランニーの理論から見た場合も、従来通り、弟子は師に服従し、型を尊重し、練習を繰り返さなければならない。しかし、これは厳格な真理への隷従を意味しない。学習とは、創造のための信頼の行為なのである。

註

- 1) 実際、ヘリゲルは、「情熱的な愛 (leidenschaftliche Liebe)」や「師に対する批判抜き尊敬 (kritiklose Verehrung des Lehres)」(Herrigel, 1951 : 52) という特徴を、日本の弟子に見出しているが、これらはまさにポランニーが知識の伝達において不可欠な条件と見なすものでもあり、両者の親近性は高いといえる。
- 2) 「不批判的」とは、外的な基準ではなく内在的な標準によって査定されることを意味する。なお、長尾訳では「非批判的」と訳されている“uncritical”を、本稿では「無批判的」とした。
- 3) “commit”は、ふつう「関与、傾倒」と訳される。しかしポランニーは、“commit”の代わりに、“submit”という語も用いている (例えば、Polanyi, 1974 : 63, 65.)。それゆえ “commit”とは、他に選択の余地のない、半ば強制的な関与を意味すると考えてよい。それゆえ、“commit”の訳語として、単に「関与、傾倒」では意味が弱く、本稿ではこれを「服従」と訳した。
- 4) 学習と発見との違いは次にある。「問題解きをする人の予知は自分自身への信頼を表現するのに対して、学習が付き従う予示は他の人への信頼を表現するのであり、それが権威の受容ということである」(Polanyi, 1974 : 208)。つまり、発見を追求する人は自分自身を権威として信頼し、学習者は師を権威として信頼する。このように発見と学習は、権威を置く対象に関して異なるが、知識の追求の構造に関しては同一である。なお、予知ないし予示とは、人が情動的に真理の存在を把握することをいう (情動については、本稿第2章第1節を参照)。
- 5) 枠組はまた、分画的枠組 (articulate framework)、分画的体系 (articulate system) などとも呼ばれる。なお、ポランニーの “articulate” の用法は、言語学での用法 (ここでは「分節的」と訳される) よりも広く (Polanyi, 1974, p. 70 の脚注を参照)、また人間の知識に言及する際にもみ用いられる (例えば、動物は、分節的な知識は持ち得るが、articulate な知識は持たない)。よって本稿では、この語の訳を、長尾史郎に倣って「分画的」とした。
- 6) 『弓と禅』では、「型」に相当する概念、例えば “Formen” (Herrigel, 1951, p. 51 参照。邦訳で

は「形式」)は、必ずしも多用されてはいない。しかし、この事実こそが、逆説的に、型のもつ意味や、型の在り方の実際をよく示しているのではないだろうか。

- 7) 発見の場がベクトル場であることは、“gradient”という語から分かる。“gradient”(勾配)とはベクトル解析の概念であり、スカラー関数(スカラーポテンシャル)の偏微分から作られるベクトルを指す。そして、この勾配自体はベクトル場を形成する。またポランニーは、「力学的な力がポテンシャルエネルギーの勾配であるように、この力の場は潜在能の勾配つまり可能な達成の近さから生じる勾配であろう」(Polanyi, 1974: 398)と言う。ここからも発見の場の図式が物理学から借用されていることが分かる。
- 8) 呼吸それ自体の重要性は、従来から少なからず指摘されている。しかし源によれば、例えば澤庵は、無心という心の有り様にとって、心を臍の下に押込めることは「初心の段階の心法の工夫にすぎない」(源, 1989: 271)とする立場を採っているという。本稿では、この工夫という観点から、すなわち、呼吸それ自体の意味ではなく、呼吸への集中という工夫が学習過程に与えた効果という観点からのみ、阿波の教えの分析を試みている。

文献表

- Gelwick, R., 1977, *The Way of Discovery: An Introduction to the Thought of Michael Polanyi*, Oxford University Press, Inc.
- Herrigel, E., 1951, *ZEN in der Kunst des Bogenschiessens*, Otto Wilhelm Barth Verlag. (稲富栄次郎・上田武訳 1981『弓と禅』福村出版)
- ヘリゲル (Herrigel, E.), 1982, 柴田治三郎訳『日本の弓術』岩波書店。
- 1991, 榎本真吉訳『禅の道』講談社。
- 生田久美子, 1987, 『「わざ」から知る』東京大学出版会。
- 源了圓, 1989, 『型』創文社。
- 1992a, 「型と日本文化」源了圓編『型と日本文化』創文社。
- 1992b, 「近代日本における武道の普遍化の二つの型 - 阿波研造と嘉納治五郎をめぐって -」源了圓編『型と日本文化』創文社。
- Polanyi, M., 1951, *The Logic of Liberty*, Routledge and Kegan Paul.
- 1958, *The Study of Man*, The University of Chicago Press.
- 1960-61, “Science: Academic and Industrial”, *Journal of The Justitude of Metals*, vol. 89.
- 1963, “The Potential Theory of Adsorption, The Authority in science has its uses and its danger”, *Science*, vol. 141.
- 1964, *Science, Faith and Society*, The University of Chicago Press.
- 1966a, *The Tacit Dimension*, Doubleday.
- 1966b, “The Creative Imagination”, *Chemistry and Engineering News*, April 25.
- 1969, Marjorie Grene ed., *Knowing and Being*, The University of Chicago Press.
- 1974, *Personal Knowledge: Towards a Post-Critical Philosophy*, The University of Chicago Press. (Paperback edition)
- Polanyi, M. and Prosch, H., 1975, *Meaning*, The University of Chicago Press.
- 相良亨, 1995, 「型の形成を考える」『相良亨著作集6 超越・自然』ベリかん社。
- 櫻井保之助, 1981, 『阿波研造一大いなる射の道の教』阿波研造先生生誕百年祭実行委員会。
- 山崎正和, 1988, 『演技する精神』中公文庫。

(博士後期課程2回生、臨床教育学講座)